

Title	植物粘質物(第15報) : Paniculatanの部分加水分解成績体
Sub Title	
Author	友田, 正司(Tomododa, Masashi) 佐藤, 訓子(Sato, Noriko)
Publisher	共立薬科大学
Publication year	1976
Jtitle	共立薬科大学研究年報 (The annual report of the Kyoritsu College of Pharmacy). No.21 (1976.) ,p.128- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学会講演要旨
Genre	Technical Report
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062898-00000021-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

No. 21 (1976)

で単一であり、D-マンノース:D-グルコース(モル比, 5:2)で構成され, 分子量417000で, 1.2%のアセチル基を有する。主鎖は β -1 \rightarrow 4結合で連らなり, マンノースの2位が関与する分枝構造で, 分枝末端もマンノースが占める。部分アセトリシス成績体のオリゴ糖は, シラン, ヤマユリ, カノコユリのグルコマンナンと同じ物質が同定され, これらの粘質多糖は, 分子量, 分枝度および位置, アセチル含量および位置, 構成糖モル比は異なるが, 配列は似たランダム構造が推定される。

植物粘質物 (第15報)

Paniculatan の部分加水分解成績体

友田正司, 佐藤訓子

(日本薬学会 第96年会 (1976年4月) で発表)

〔目的〕 Paniculatan はノリウツギの樹皮から得た主粘質物で, その性質, 構成, 分子量, 分枝構造の一部などについてすでに報告したが, さらに構成単糖相互の結合順序を解明する目的で, その一手段として多糖を部分加水分解し, 成績体のオリゴ糖を分離して構造を研究した。

〔実験〕 多糖を 0.5 N H_2SO_4 , 100°, 2 hr 処理して中和脱塩後, セファデックス G-15 カラムでオリゴ糖部と残存多糖部を分離し, さらに多糖部を 1 N H_2SO_4 , 100°, 2 hr 処理した。得られた各オリゴ糖画分を DEAE セファデックス A-25 (ギ酸型) カラムにかけ, ギ酸濃度を段階的に増して溶出させ, 各画分を PPC で分離精製した。オリゴ糖は比旋光度測定後, 還元成績体をメタノリシスして TMS 化し, その GLC により構成糖を分析し, 温和なメタノリシス後カルボキシル基還元反応を行ない, 成績体をメチル化後加水分解し誘導したアルディトールアセテートの GLC-MS などによって, 構造を調べた。

〔結果・考察〕 第1次部分加水分解による主成績体は, 4-Me- α -D-Glc(*p*)A-(1 \rightarrow 4)-D-Gal(*p*) の構造であり, 第2次部分加水分解成績体のうち, α -D-Gal(*p*)A-(1 \rightarrow 2)-L-Rha(*p*) および α -D-Glc(*p*)A-(1 \rightarrow 3)- α -D-Gal(*p*)A-(1 \rightarrow 2)-L-Rha(*p*) の構造を決定した。他に数種のアルドピロウロン酸が得られ, それらの構造についても検討した。

植物粘質物 (第16報)

アルテア根の粘質多糖

友田正司, 金子幸子, 江端峰子, 永倉照代

(日本薬学会 第96年会 (1976年4月) で発表)

〔目的〕 緩和粘滑薬, 鎮咳薬に用いられるアルテア根の粘質物の化学的性質に関する報告は少なく, それらの結論も一致していない。われわれは粘質物の主体を占める物質の性質を明らかにする目的で, 原植物のピロウドアオイの新鮮な根を材料として研究を行なった。

〔実験〕 試料を細切後冷水抽出した液にエタノールを添加して粗粘質物を得た。その水溶液を DEAE セファデックス A-25 (炭酸型) のカラムにかけ, 水から炭酸アンモニウム濃度を段階的